

Title	小島吉雄先生を偲ぶ
Author(s)	鈴木, 亨
Citation	語文. 1990, 55, p. 6-8
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68817">https://hdl.handle.net/11094/68817</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 追悼小島吉雄先生

### 小島吉雄先生を偲ぶ

小島先生には新制の第一期生として、学部から大学院まで九年間御指導を仰ぎました。戦後ではありましたが、学部も創設間もない頃ではありましたし、何もかもが不自由な中で、戦時中ろくに勉強もしていなかった学生を相手に、どんなに御苦勞をなされたことかと今にしています。五分刈りの精悍な風貌で（髪を伸ばされたのは、昭和三十一年盲腸炎で入院された時以来）、長身をつんのめるように運んで来ては周囲を叱咤激励して活を入られた。怖い先生でした。「語文」第二十五輯が先生の退官記念号で、扉に先生の写真がごぞいます。何かでふとその頁を開くようなことがあると、私は今だにドキッとしてしまいます。途端に不勉強を見透かされたような気がするからです。じっと見れば、なつかしい、いろいろなことを語りかけて下さる温顔なのですけれど。

個人的な回想に耽ることをお許し下さい。本当に何から何まで教えて頂いたような気がします。忘れもしませぬ、初めて演習の発表をした時、精一杯準備してかなりの自信で発表したのですが、終わるや否や大目玉を食いました。「君の言うてる事は皆本に書いたある。君はなんにも解つたらん」。悔しかつたけれど、私の勉強につ

いての考えが変わつたのはこの時からに違いありません。先生には九年間、随分沢山の単位を頂きましたが、最初に取得したのは二年生の時、「日本文学思想史」という普通講義でした。堅苦しい本筋よりも挿入された雑学的部分が非常に興味深かつたし、ノートをしっかり取って万全の構えで試験に臨んだのですが、結果は「可」でした。これは厳しいという驚きぐらいで忘れていたのですが、確か修士課程が終わつた時のコンパで、ふと先生がこの何年も前の事を言い出されたのには驚きました。「わしの言つた通り書いてるから、これはきつと頭悪い思たんや」。誰にどの教科でどんな成績をつけたか、恥ずかしながら私など、二十分も覚えて居られないでしょう。それに自分の話した通りの答案に「可」をつける見識、本当に何重にも、感動してしまいました。

学生が自分から何かしたいと言い出すのが大変お好きだつたようです。歌舞伎を観に行くと言えば、「よし、事前勉強会をやつたるから、何時に集まれ」とおっしゃつて、忠臣蔵なら忠臣蔵各段の見所を克明に話して下さいました。力弥の「いまだ参上、仕りませぬ」が一回毎にどう盛り上つて行くのか、三つの自害には皆救いが有つて

鈴木 亨

好いなど、今でもお話しぶりをまざまざと思い出すことが出来ます。

昭和二十六年十月に、初めて学生の研究発表会を行いました。豊中の萩の寺に朝から出かけて、植田修平さんが浄瑠璃の発表を昼食を挟み延々三時間半にわたりやりました。その後やることになっていた私は度肝をぬかれ、それでも頑張つて一時間ほど京伝の読本について話しました。研究発表のやりかたなど、当時の学生は誰も知らなかったのです。三時頃やつと終わつてそれから先生の講評が始まりました。「両君共大変雄弁でありまして」と、御機嫌だったと思います。そして研究発表というものは精々二十分か二十五分位でやるものだと教えて頂きました。そんなものなのに、よくそれまで黙つて聴いて居られたことだと申し訳ない気持ちで赤面していましたら、何の、それから先生の講評が約二時間続きました。書誌学的な解説を随分詳細にやつて頂いた記憶があります。それから他の先生方の講評があり、日も大分暮れてから散会したことでした。後にも先にもあんなすごい発表会はしたことがありません。

同じ年の十二月、毎日新聞大阪本社の講堂で国文学会主催の公開講演会がありました。出来たばかりの学料だから、市民に広く宣伝して置く必要があるのだとおっしゃつて、研究室の先生方と一緒に何度か試みられたものです。その時先生は「子規鉄幹不可併称論」の話をなさつたのですが、同時に講堂の両脇・後部にコの字型に卓を並べて、明治短歌資料の展示をされたのです。何百冊あつたことでしょうか。それがすべて先生の蔵書だったのだから驚きです。新古今を中心とする古代中世和歌史の権威としては遙かに仰ぎ見ておりましたし、芭蕉・西鶴・近松など近世文学への深い御造詣も存じておりましたが、これには圧倒されました。学生達が二十人ほど動

員されて、寝屋川のお宅まで行き、先生がお蔵から出して置かれた書物を銘々大風呂敷に包んで、電車で新聞社まで運んだのです。先生は後から行くから、先に並べておけとおっしゃつたので、講堂に到着してさて並べようと思つたのですが、どう並べて良いのか誰にも解りません。私の提案でとにかく奥付の発行年代順に並べようということになり、皆で掛かりましたが、それすらなかなか大変なことでした。やつと終わつて一息ついてると先生が来られました。いきなり大喝一声、「誰が並べた？滅茶苦茶やないか」。もう講演の開始まであまり時間がありません。青くなつてると、先生が自分でさつさと並べ変えて行かれました。テーマ別、流派別、一々「これはこういうものやからこことや」「さつきのあれ、こつちがええな」などてきばき、お傍にいて小気味良いほどの整理でした。数々の貴重な写真も有り、例の怪文書「文壇照魔鏡」などまでさりげなく並べてあつて、資料展示として第一級のものだったと思います（この時の主要展示物の目録が「語文」第五輯に掲載されています）が、それにしても学者になるということはこんなに大量の資料を手元に置き、それをこんなに自在に操作出来るようになることかと、殆ど絶望に近い長嘆を久しくしたことでした。

院生で「文車」を創刊した時も大変喜んで下さいました。その掲載論文の一部を近世文学会で発表するようにお勧め頂き、その分量やら抜き出す要素、配列順序に至るまで細かに手を入れて下さいました。二度目の発表はもう私が島根に行つてからでしたが、別の中世の学会に出ておられた筈なのに、私の発表時間にはちゃんと客席におられました。御心配をお掛けしていたからに違いありませんが、師恩の深さ、胸を熱くしたことでした。

松江に赴任する時、大阪駅のフォーラムまでお見送り頂いた方々の中に先生のお姿もありました。冥利に尽きるという言葉をこの時ほど痛感したことはありません。御退官前の昭和三十八年夏には御希望で後鳥羽院ゆかりの隠岐へ、国文学会の研修旅行で来られ、ゆつくり御案内することが出来ました。又来たいとおっしゃっていましたが、ついに実現しなかったのが心残りです。米寿のお祝いの際にもその事は申し上げたのですけれど。

不肖の身を嘆くばかりの私には、もはやひたすら御冥福をお祈りするしかありません。合掌。

(新制第一期生 島根大学教授)